

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

AC ミランアカデミー愛知 特別寄稿②

* 12 年ぶりの邂逅。私たちが紡いだキズナの行方 *

山田 晃裕

2023 年 12 月。40 歳目前のサッカーコーチに、クリスマスプレゼントは唐突に訪れた。

「アキさん、ご報告があります」と1通のメッセージ。送り主は開校直後から 7 年間コーチとして働いてくれた仲間の 1 人。現在は JFL(4 部相当)・ヴィアティン三重のスタッフとして働いている。「輝樹の獲得にゴーサインが出ました」

名前のあがった「輝樹」とは、折口輝樹さん、かつての教え子の 1 人だ。彼と私たちの出会いは 2011 年の開校イヤーにまで遡る。当時のテクニカルディレクターであったマッテオコーチが、小学 4 年生(10 歳)だったこの少年の手足の長さ気づくやいなや、「この子は今すぐにでも GK(ゴールキーパー)を始めるべきだ」と口にしたのだ。

私たちとしてもまだプロジェクトのスタートを切ったばかり。子どもたちや親御さんの顔と名前がなかなか一致しない状況でありながら、「彼の親御さんを探そう」と一目散に駆けていく。

お母さんを発見して話をしてみると、地元のクラブで GK を始めたばかりとのこと。続いて現れた 190cm オーバー長身のお父さんを見るや、イタリア人のトークに一層の熱がかかった。フィジカル面の成長の伸び代を見たからだ。

“Per favore, credetemi. Il portiere è il ruolo perfetto per vostro figlio.”
(どうか信じてください。ゴールキーパーこそご子息にとって最適なプレーロールです)

さほどイタリア語文法を勉強してこなかった私が、二人称複数の命令形を覚えたのはこの時だ。

ほぼ時を同じくして、新たなスタッフが数名加わった。私よりも年輩で長身の男性が 1 人。彼こそ、前述のメッセージをくれた清水俊博さんだった。サッカー経験を聞いていく中で GK 経験者であることを聞いてすぐに決めて伝えた。「GK コースと一緒にやりましょう!」と。

新たなサッカー文化を根付かせ始めたばかりの萌芽期。私を含めた日本人コーチ全員が AC ミランの育成哲学を体当たりで理解しながら、それに基づくトレーニングを日本の子どもたちに提供することだけで精一杯だった。体験レッスンなどを複数回繰り返した後、2012 年から正式に当アカデミーの GK コースが開講。コーチ 1 人に教え子 1 人、マンツーマンレッスンからのスタートだった。

もちろん順風満帆だったわけもなく、すぐに壁にぶち当たった。まず、明確な指導教本がない。私たちにとって明確だったのは、AC ミランが求める「現代的なゴールキーパーを育成しよう」というなんとも曖昧なメッセージだけ。これは GK コーチ経験のあるイタリアの友人に聞いて分かったのだが、ボール処理の手足の出し方などディテールが日本のそれと異なる部分が多く、「完全にイタリア・AC ミラン流で教える」というのはなかなか困難な状況に陥った。

日本初のACミランアカデミーという私たちの組織に、「前例」があった試しはない。「前例がないなら作るしかない！」ということで、現代的な GK 像とACミランの育成哲学とシンクロする1つのスタンダード＝【手も足も使える GK の育成】を柱に据えることになったのだ。

サッカーとは足を使うチームスポーツ。そもそも足で物体を操るのは容易ではないし、広大なフィールドで、敵味方合わせて22人のプレーヤーが1つのボールを争う。他者(相手)の妨害をかき潜りつつ、他者(味方)の意図を汲みながらプレーする。故に、簡単にゴールは決まらない。「自由度は高くせに、簡素化できない」という点で、日本文化となかなか相性の悪い、酷なスポーツだとも思っている。

その中でもGKは最後に責任を押し付けられる、ある意味「損な役割」だ。ストライカーはゴールを決めきれなくても中盤でプレーするミッドフィルダーのパスのせいに、ミッドフィルダーはその手前、味方のディフェンダーのせいにできる。そしてディフェンダーは失点の咎をゴールキーパーに押し付けることができるのだ。「なぜ止めないんだよ」と言えば簡単なハナシ。

しかしGKには責任転嫁できる他者がいない。後ろを振り返ってもゴールネットがあるだけ。相手ストライカーに「もうちょっと優しく打ってくれよ」とは口が裂けても言えないのだから。

バレーボール界の名伯楽として知られる Julio Velasco。イタリア代表を率いて数々のタイトルを獲得してきたが、「必要とされるいい選手」の定義を尋ねられた時に、こんなことを言っていた。

「チームスポーツをプレーするアスリートに求められるのは「問題解決能力」。トスの性質は均一ではないからこそ、あがってきたボールすべてを“Perfetto”と言って相手コートに打ち返す、そんなアタッカーこそチームに必要とされている。」

責任を転嫁できる他者がいないという点で、GKは孤独である。フィールドプレーヤーとは1つのミスの重みが決定的に違う。とは言え、ノーマスはありえないスポーツ。ミスが減らず努力をするために、コーチとプレーヤー、まさに二人三脚で徹底的にまずは基礎を磨いていった。

大きな刺激になったのは、2012年の春、私たちとして初めてのイタリア遠征。初めての国際舞台はまったくもって未知の世界だった。日本の少年サッカーとは異なる7人制、オフサイドなし。たくさんさんの違いを身をもって体感することになった。

私たちのチームのゴールを守るのはもちろん当時10歳の折口選手。地元クラブとたくさん試合をすることができた中でとても印象的だったのが、どのチームもGKの表情が輝いていたこと。誰もが「僕こそチームの柱だよ」みたいなことを口にしていて。失点をまずは恐れないし(もちろんしたくないが)大きく気にしない、自分にしかできないことの重要性を理解している。

日伊間で根本的に異なるのは、失敗の捉え方。あれだけ自信たっぷりの発言をしても、キックもキャッチもミスするシーンを何度も見てきた。

失敗しないためにスポーツをしているのではない。現代的なゴールキーパー像を目の当たりにしたこと以上に、文化の違いだけでマインドセットが異なることを10歳の少年たちから学べたことが私個人にとってもいい刺激になった。

異国での経験は折口選手にとっても大きな刺激になったようで、2年後ローマにて開催したイタリア遠征にも参加した。フラスカーティ地区に滞在しつつ、1週間かけてローマの名所を巡ったほか、当時ACミランの提携クラブの施設でトレーニングをしたり。

締め括りはこの提携クラブとのトレーニングマッチ。ハイレベルな選手が揃う相手に対して、いいプレーができる時間は少なく、苦しい展開が続く試合だった。思春期の入口に差し掛かった折口選手も、失点を重ねるにつれてイライラ(この反応もある意味思春期らしいものではあったのだが)。

目を引いたのは、相手のゴールキーパーだった。小柄なのにビッグプレーを連発するだけでなく、味方とコミュニケーションを欠かさず、笑顔を絶やさない。この日の折口選手とは良くも悪くも対照的で、試合後に思わず声をかけた。

“Complimenti per la tua prestazione che mi ha colpito molto!!”

(おめでとう、君の活躍に感動したよ！)

“Grazie mille, mister”と笑顔で答え、踵を返す彼の背中には番号ではなく、こんな言葉が書かれていた。“ParoLe belle anche se perdiamo”



後ろを守る者はなく、抱える責任の重さは人一倍。この日見られたパフォーマンスは、勇気をもらえる言葉を背負ってプレーしていたからこそなのかもしれない。プレーのクオリティを1段階引き上げるような魔法の言葉の意味を(ちょっとふて腐れていた)折口選手にも伝え、帰国後お母さんにこの写真を送っておいた。

私たちの元を巣立った後も、中学・高校と順調にキャリアアップを続けた折口選手。一緒にたくさん経験をした親子とのつながりは途切れることはなく、よく連絡を取り合っているいろいろな話をした。

大学は岩手県の大学へ。1年生の時からレギュラーとして活躍し、東北地域選抜でのプレーや、Jリーグクラブへの練習参加を経験。

そして昨夏、大学ラストイヤーの総理大臣杯では快進撃を続け、遂には全国の頂点に立つという快挙を成し遂げた。これにはビックリである。決して順風満帆だったわけではなく、いろいろな壁にぶち当たってきたことを知っている。その都度たくさん話をしてきただけに、まるで自分のことのようにうれしかった。

ここで冒頭のエピソードに戻る。大学卒業を控えた年末までにJリーグクラブへの入団こそ叶わなかったが、その1つ下のカテゴリーであるJFLクラブからのオファーが届いた。しかも、彼にとって最初のGKコーチである清水さんがフロントスタッフとして働くクラブから。公式発表があったのは12月25日だった。

2012年、私たちのフィールドの中で始まった物語。清水コーチの温かくも妥協を許さない指導にも、意欲的に学ぶ姿勢を絶やさなかったことが、折口選手のゴールキーパーとしての確固たる土台を築くことにつながったのは言わずもがな。ACミランアカデミー愛知で生まれた師弟愛は、およそ12年後のクリスマスに邂逅の時を迎え、2024年からJFLを舞台に新たなスタートを切ろうとしている。2つのスタート地点に、私たちが育んだキズナが根付いていることに、組織として大変感慨深いものを感じている。

この知らせを誰よりも喜んだのは、当時のテクニカルディレクターであるマッテオその人である。ACミランに所属する前は、キエーヴォ・ヴェローナで育成スカウトとして辣腕を奮ってきた彼は、事あるごとに「育成年代に携わるスポーツ団体とそのスタッフにとって、最大の勝利はより良い未来に貢献できたその瞬間にある」と口にしてきた。

クリスマスランチ明け、4人揃ってのビデオコール。「こんなにいいクリスマスはないよ」としきりに口にする。戦績やら所属チームのカテゴリーやらを考慮せず、「誰にだって拓かれた未来がある」と信じてきた。サッカーを通じて育まれてきた人間性をしっかりと見極めようと努力してきた私たちの勝利でもある。活躍する場所こそ違えど、サッカー一界で働く上で欠かせない信念を確認する機会にもなった。

サッカー選手になれるのはほんのひと握り。教え子たちみんなをサッカー選手にできる魔法は存在しないが、サッカーというスポーツの美しさ・おもしろさから人生を豊かにしていくための手伝いはできる。いろいろな成長模様を描く教え子たちのより良き未来を願い、ACミランアカデミー愛知はこれからも前進を続けていく。

(ACミランアカデミー愛知)

* はるかなるサンレモ (2) *

堤 康德

サンレモ旧市街は、ラ・ピーニャ(La Pigna)と呼ばれる(pigna とは松かさの意)。海を望む南側の丘の斜面に、住居が密集して立ち並び、その間を狭い路地が走る、まさに迷宮のような区域である。松かさの鱗片を思わせるその外観から、このような名称がつけられたらしい。9世紀頃からサラセンの海賊の攻撃に頻繁にさらされるようになったサンレモ市民が、防衛のために16世紀まで補強を重ねてできた市街の形状だという。



【サンレモ旧市街の路地】

長篇第一作『くもの巣の小道』は、主人公ピンが住む旧市街ラ・ピーニャの描写から始まる。

陽ざしは、冷たい壁をかすめてまっすぐ降下しなければ、路地の奥まで届かなかった。その壁が道の両側に間隔を置いて立っているのは、まっ青な空を横切るアーチの力によってである。

陽ざしはまっすぐに降りて、壁のあちこちに不ぞろいに並ぶ窓に向かい、窓敷居の鍋のなかに植えられたバジルやオレガノの株や、ロープにつるして干してある肌着のあいだを通り、ラバの小使用の溝がまん中に掘ってある、段々になった小石舗装の道に落ちる。

(Italo Calvino, *Il sentiero dei nidi di ragno*, Torino, Einaudi, 1976, p. 29)

『見えない都市』で語られた架空の町ピッラ(Pirra)もまた、ラ・ピーニャを髣髴とさせる。

長いこと私にとってピッラは、湾を望む丘の斜面にはめこまれた町でした。高い窓と塔がそなわり、カップの内部のように閉ざされた町。中央には、井戸の底のように深い広場があり、この広場の中央には井戸がありました。(Italo Calvino, *Le città invisibili*, Milano, Mondadori, 2011, p. 91)

ラ・ピーニャには実際に、この記述と符合する広場がある。「悲しみの広場」(Piazza dei Dolori)がそれだ。1502年に蔓延したペストの収束のあと、この広場に、聖セバスティアヌス祈禱所が建造された。ペストから信者を守るという伝説のあったセバスティアヌスに謝意を表してのことであった。ここに、「七つの悲しみの聖母」信心会の拠点が置かれたことから、「悲しみの広場」の名称がついた。(Italo Calvino, *Sanremo e i dintorni*, a cura di Veronica Pesce, Palermo, Palindromo, 2022, p. 87)

カルヴィーノ生誕100年を迎えるにあたり、市内のゆかりの場所にはそれぞれ解説のパネルが立っているが、この広場の一角にもそれがあつた。それは、丘の中腹にある小さな広場だった。カルヴィーノが言うように、視界が閉ざされており、たしかに井戸の底にいるような感じも受ける。そして実際に広場には、1830年頃に作られたという井戸があつた。

サンレモを舞台にした初期の短篇『カニを積んだ貨物船』(*Un bastimento carico di granchi*)には、「悲しみの広場」の地名が現れる。この短篇の初出は1947年7月6日付『ウニタ』紙ジェノヴァ

版、のちに短篇集『最後に鴉がやってくる』に収められた。



【悲しみの広場の井戸】

短篇の書き出しを読んでみよう。訳出にはいつも苦労するが、カルヴィーノはどんな作品の書き出しにおいても、わずかに数行で、自らの小宇宙を顕現させられる稀有の作家のひとりだと思う。

「悲しみの広場」の少年たちが最初に海で泳いだ日は、ま新しい青空に明るく若々しい太陽が昇る、四月の日曜日のことだった。(Italo Calvino, *Ultimo viene il corvo*, Milano, Mondadori, 2010, p. 15)

「悲しみの広場」の少年たちはみな、この広場一帯に住み、遊びやいたずらをとともに行う悪童仲間だ。短篇の舞台は、港に放置にされてカニの棲家と化した沈没船である。

港には、戦争中にドイツ軍が港を封鎖するために沈めた貨物船がまだ横たわっていた。じつは、二隻の船が重なり合い、見えていたのは、完全に水没した船の上に乗っているほうだった。(p. 16)

彼らは、この沈没船の探検に出かけ、あとから海中を潜ってやってきた「アレネツラ」の連中と甲板で取っ組み合いのけんかを始める。

「悲しみの広場」一味は、相手のひとりを海に突き落としたことから、攻勢に転じる。一方、泳ぐのが得意な「アレネツラ」側は、次々に海に飛び込み、相手を水中に誘いこもうとするが、「悲しみの広場」側は、その手には乗らず、船にとどまる。

船首には、6歳くらいの少女がいて、先ほどから、裏返ったクラゲを棒切れで元に戻すことに夢中である。「悲しみの広場」の少年たちは、この少女が「アレネツラ」の一員にちがいないと思い、まるで人質をとった気でいた。彼らのひとりが少女の肩をつかむと、少女は、棒の先端にバランスよく乗せたクラゲをこの少年の顔面に投げつける。

少女はみな顔を見て笑った。それから振り返ると舳先まで行き、指先を合わせて両腕を伸ばしてから、天使のように飛びこんだ。そして、振り返ることなく泳ぎ去った。「悲しみの広場」の少年たちは、その場に立ちつくした。(p. 20)

「天使のように飛びこんだ」の原文は、*si tuffò ad angelo* である。水面ぎりぎりまで両腕を大きく広げて、両脚を伸ばし、頭から水面に入る飛び方である。英語では *swan dive* または *swallow dive* というようだ。

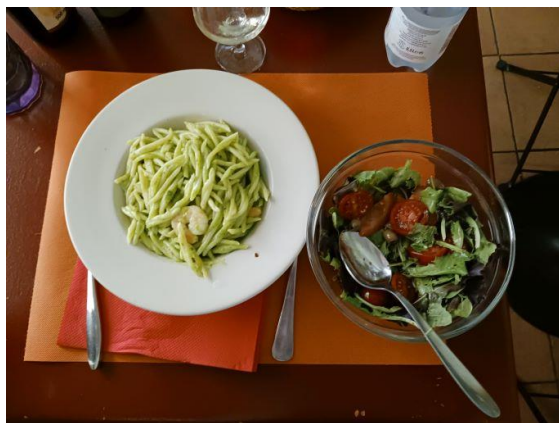
少年たちは、わずか6歳の女の子のみごとなジャンプにあっけにとられたのだろう。サンレモの地図を見ると、今もアレネツラと呼ばれる地区がある。そこには、パラソルの並ぶ公営ビーチがあり、旧港に隣接している。その語源は、砂地を意味する *arena* だろうか。アレネツラ一帯で生まれ育った子供たちは、きっと泳ぎが達人だったのだろう。もっとも、丘の中腹にある「悲しみの広場」も決して海から遠い位置にはない。せいぜい歩いて10分といったところか。

第一短篇集『最後に鴉がやってくる』には、全30篇が収められている。その冒頭を飾るのは、「ある日の午後、アダムが」。次が、「カニを積んだ貨物船」、そして3作目が「魔法の庭」。いずれも戦後まもないサンレモにおいて、「ま新しい青空」と「明るく若々しい太陽」のもと繰り広げられる、澁刺とした少年と少女の開放感あふれる物語である。カルヴィーノの「エデンの園」三部作と呼びうるかもしれない。

カルリ通りにあるサンレモ市立図書館には、カルヴィーノの両親の名が冠せられた文庫がある。農学者の父マリオと植物学者の母エヴァが長年にわたり集めてきた、自らの専門分野にかんする資料約 12,000 点が、ここに収蔵されている。イタロと弟のフロリアーノが、母親の死後寄贈したものである。

私がこの図書館を訪れたとき、玄関ホールには、幼いカルヴィーノと両親、当時のサンレモを伝える写真パネルが何枚も立てかけられていた。それらは、作家の没後 20 年にあたる 2005 年 11 月から 2006 年 1 月にかけて、イタロ・カルヴィーノ海岸通りの元鉄道倉庫で開催された展覧会「カルヴィーノとそのルーツ」(*Calvino e le sue radici*) で使われたものだった。展覧会のカタログがあればコピーしたいと思い、受付の方に問い合わせたところ、わざわざ館長のロッセツラ・マスperlさんを紹介していただいた。図書館の皆さんの対応はとても親切で、館長には、展覧会のカタログだけではなく、他の貴重な文献も何点かいただいた。旅の思わぬ収穫だった。

5 泊 6 日のサンレモ滞在中、魚料理ばかり食べていたが、ラ・ピーニャのふもと付近に位置するレストラン「ラ・チョトラ」(La Ciotola) で食べた「エビとバジルソースのトロフィー」(Trofie al pesto con gamberi) がいちばん記憶に残っている。trofie はリグーリア地方特産のショートパスタ。いうまでもなく、バジルソースはジェノヴァ特産である。白ワインはリグーリア産ヴェルメンティーノを頼んだ。



【 Trofie al pesto con gamberi 】

サンレモから、世界遺産チンクエッテッレを構成する 5 つの町のひとつ、モンテロッツォに向かった。イタリアの鉄道網のなかで、ジェノヴァとラ・スペツィアを結ぶ列車の車窓が私はいちばん好きだ。東リヴィエラ海岸(チンクエッテッレもその一部)に沿って走るこの路線は、トンネルが多い。そしてトンネルを抜けると必ず、青く透き通った海の断片がすぐ目の前に現れる。

モンテロッツォも夏の盛りとあって、多くの観客が訪れ、ビーチはどこも人であふれていた。大きな岩の天辺から、スワンダイブや後ろ宙返りなど、みごとな飛び込みを披露する若者たちがいた。

旅の主な目的は、詩人エウジェニオ・モンターレの別荘を訪ねること。だが、Villa Montale の文字を刻む門柱の奥に入ることはできなかった。高級レジデンスホテルとして使用されているようだ。Villa のある丘をさらに登り、海を眺めてみた。ひょっとして、モンターレがかつて別荘のバルコニーから見たように、コルシカの島影が見えないものかと期待して(2023 年 6 月号の本稿第 43 回ご参照)。空気は暑さのせいかわどんでおり、それらしき姿はどこにもなかった。サンレモ滞在中も、旧市街の高台から海のはるかかなたに目を凝らしたが、やはりコルシカは見えなかった。

リグーリア最後の晩餐は、チンクエッテッレ特産のワイン「シャケトラ」(sciacchetrà)を飲んだ。いつかこの地にまた来られるように願いながら。

本稿執筆にあたり以下のサイトを参考にした。

La Pigna: Sanremo Vecchia - Info SANREMO - your city guide (info-sanremo.com)

La fontana di Piazza dei Dolori - Pagina 2 (sanremostoria.it)

Sanremo - Wikipedia

(上智大学准教授)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>